

---

# 終わりの始まり

春

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

終わりの始まり

### 【Nコード】

N1329A

### 【作者名】

春

### 【あらすじ】

ちせの中に存在するもうひとりの兵器のストーリー！。

## 終わりの始まり

我々はどこで間違った？

誰がこんなことになるかと予想できた？

我々は罪を犯した。

誰のせいでもない罪を。

我々は『造って』しまった。

誰かのためでは、ない。

我々のためでも、ない。

仕方がなかった。

終わらせるために：

何を？

何を終わらせるためにだ！？

むしろ始まりじゃないか！？

我々は『それ』を完成に近づけるたびに恐怖を植え付けられた。

『それ』は貪欲に、ただ貪欲に喰らい続けた。

世界のありとあらゆる情報を喰らい続けた。

それは、人のこと、生物のこと、世界のこと、戦争のこと、兵器のこと：全てを：

回線に繋がれた『それ』は世界の全てを見たのかもしれない：

研究者の誰かが『それ』を破壊しようともくろんだが失敗した。

意志を持ってしまったのか。

はたまたただの偶然なのか。

破壊しようとした研究者は：死んだ。

いや、

殺されたのだ。

その研究者は『それ』の危険性を主張したが、追放された。  
そして破壊しようと近づいたところ…

パン！

拳銃を撃ったような音と共に上半身が消えた。下半身は血を流しながら糸の切れた人形のように倒れた。

何が起こったのか分からない。殺された本人すらも…。

この事実が公にされなかった。

もともとこの研究も極秘だったが…。

あれはいつたいたんだったのだろうか？

『それ』は情報を喰らうたびに「変化」していった。

もしかしたら「変化」ではなく「進化」だったのかもしれない。

形大きさを自由自在に変え、もはや『それ』は我々の知識では解明できなくなっていた。

常識も、科学も、世界にあるべき法則すらも越えている…。

我々にはもう止められない。

誰にも止められない。

我々にはどうして『それ』が出来たのか分からない。

誰にも分からない。

我々を…遠からず殺すだろう。

誰かを…たくさん殺すだろう。

『それ』が……。

我々は一つだけ、本能的に『それ』がなんなのか分かった気がした。  
『それ』は、

一罪一

人間の越えた知識と、欲望と、驕り。

それらが生み出したもの。

在るべきではないもの。在ってはならないもの。

だが…

必ず在るべきもの。

在って当たり前のももの。

でもあった。

それにしても『それ』はなんのために造られたのか？

戦争に勝つため？それとも終わらせるため？

違う、「終わり」を「始める」ために造られたのだ。

上の偉いやつらはそんなことを全く思っていないだろう。

やつらはただ命令するだけだ。自己保身のために…。

『それ』には唯一の弱点がある。それは外。この無菌真空の中でしか生きられない。（生きるという表現もおかしいが）

とりあえず外ではうまく機能しないのだ。

よって何かに寄生もしくは融合しなければならない。

そして、その時が来たら終わりが始まる…。

さて、そろそろ研究の続きを始めようか。

『それ』を完成させるために…。

## 名前無きモノ『それ』

『それ』

名前はなかった。

ただ抽象的に表現するならば『それ』は『罪』であった。  
罪、か…『それ』が何かしたわけではないが…。  
するとすればこれからだ…。

いつまでも『それ』という表現も可哀想だ。

そうだ、私が名前を付けてやろう。名前は…

『ペシエ』

どこの国だったか忘れたが意味は『罪人』。

しかし…研究対象に名前を付けるのは私の悪い癖だ。

この前もたしか名前を付けていたな…。

名前を付け何日経ったのだろう、私は『ペシエ』に対して愛着を持っていた。

そう、まるで自分の子のように…。

恐怖を植え付けられた、なんてことはもう忘れていた。

『ペシエ』に決まった形はなかった。

毎日見る度に形を変えていた。

時には魚のようなもの、時には樹など植物のようなもの、更には人間の形を模していた…。

あれはいったいなんなのだ？

その度に私は悩まされていた。

ある日…私はある実験をおこなってみた。

それは『ペシエ』に意識があるとすれば、言語能力を付加できない

か？

という実験だった。

私は愛着がある分話したかった。

『ペシエ』と…。

やり方は簡単だった。

私が作り上げた言語能力プログラムを『ペシエ』にインストールすればいい。

だが下手に刺激すれば殺されるかもしれない。

あの研究者のように…。

しかし、これが成功すれば私は『ペシエ』と話せる。私だけが…。  
ある意味独占欲が湧いていたのかもしれない。

自分勝手な欲望が…。

私は…遂に実験をおこなった。

何故か不思議と怖くなかった。

そして実験は…

失敗だった。

それもそうか、もともと『ペシエ』は「終わり」を「始める」ために造られたのだから。

しかし、奇跡が起こった。

『ペシエ』の状況、環境などを見るコンピュータに反応があった。

そこには文字が書いてあり、私はすぐに答えた。偶然の産物なのだろうか…。

もしかしたら必然だったのかもしれない…。

とりあえず私は『ペシエ』と話せるようになったのだ。

実験が成功していれば『ペシエ』は口をきき、声をだしていたのだが…。

コンピュータに書いてあった文字はこうだ。

「オ前ハ誰ダ、私ハ何ダ？」

…嬉しかった。どうやら『ペシエ』には目があるようだ。

とりあえず私はこう答えた。

「私はお前の創造主、お前の名前は『ペシエ』」

：私は思った、『ペシエ』には自我があり、命がある。

人間はとうとう造ってしまったのだ。命を。

私は神など信じていないが、神を冒瀆したような、そんな感覚に襲われた。

だが後悔はしていない。

それからまた何日たったか。

私と『ペシエ』は色々と会話をした。

いつ頃からか言葉の使い方も流暢になり『ペシエ』は私のことを「父さん」と呼ぶようになった。ここまでくるともはや親子だった。

そんなある日：『ペシエ』はこう質問してきた。

「父さん、ペシエは何のために生まれたの？」

：造られたモノとしては至極当然の質問かもしれない…。

私は困りつつもこう答えた。

「ペシエ、お前は「終わり」を「始める」ために生まれたのだよ」

：やはり意味が分からなかったのだろうか。『ペシエ』はその無菌真空の中で困っているような気がした。

本当に楽しかった。『ペシエ』、私の可愛い子。

しかし日常は突然崩れるものなのだ。

その日は急に訪れた。

この研究所もあと少しで戦闘地域に入るという。それと早く『ペシエ』を投入しなければ間に合わないらしい。

馬鹿なやつらだ。『ペシエ』が投入されれば「終わり」が「始まる」。

それにこの無菌真空の中でしか生きられない『ペシエ』をどう投入するのだ？

その答えはすでに用意されていた。

運ばれてきた少女…。



まさか…まさか！

そう、考えた通りだった。

その少女との融合。

遂に…この時が来たか…。

私は『ペシエ』との最後の会話を交わした。

「ペシエ、お前は外の世界を見れるんだよ。しかし世界は醜く汚い、お前の力を使って「終わり」を「始める」んだ」

『ペシエ』は無菌真空中で悲しそうだった。

「父さん、また会えるよね？」

…私はその質問に答えなかった。

そして寄生融合が始まる。

一翌日—

研究所は空爆に遭った。私は空爆から逃げられなかった。

そうか、私は死ぬのだな…。

悔いはない、『ペシエ』を生み出したことが人生で最高の幸せだった。

『ペシエ』、私の可愛い子。どうかお前だけでも生きてくれ…。

意識が遠のく中、私は信じない神に願った。

ああ、神よ。

どうか『ペシエ』の罪を許してやってくれ、そうすれば『ペシエ』は——。

## 放たれた私（達）

…私は今どこにいるんだろう？

私の名前は『ペシエ』

父さんがつけてくれた。意味は分からないけどなんだか私に合ってるみたい。

昨日、私はこの少女と融合した。

私の存在に少女はまだ気づいてないらしい。

これからどうなるんだろう？

父さんは「終わり」を「始める」ために私を造ったって言ったけど、今もその意味は分からない。この少女と融合したことにより私はあの無菌真空の中から出られた。

その代わり父さんと離れてしまったけど…。

父さん、今なにしてるのかな？

私は…また会いたいよ？また…話したいよ？

しばらくして私（達）は「敵」と遭遇する。

「敵」は「人間」だった。

ワケも分からず私（達）は混乱していた。ただ、「敵」は殺気で満ちていた。

その殺気に反応したのか私（達）に変化が起きた。

私は少女を操り、少女の意識は奥底へ…。

そして…

そして、身体から兵器が「生えて」いた。私はその身体を使い、「敵」を殺した。

瞬間、私は理解した。

私はこの「力」を使い、「これ」を終わらせるために生まれたのだ…。

「これ」は「戦争」なんだね？

多くの命が意味もなく犠牲になる戦争なんだね？ 権力者の貪欲な生への執着とわがままな欲望による、幼稚だけど規模の大きいケンカ。権力者は正義のためと言ってるけど、その正義はたしかな正義ではない。

そうやって始まる無意味な戦争なんだね？

でも私（達）が終わらせてあげる。

私にはそれができる「力」がある。

…でも、違っていた…。私の「力」はそのためにあるのではないと…

手遅れになった後で気付く…。

…日にちが経つにつれ私は異変に気づいた。

それまでは「敵」を殺す時には、少女の意識は奥底へ、そして私が少女の身体を使い殺していた。だが最近はこの少女が意識を保ったまま私の「力」を使っているのだ。

原因はおそらく「あの日」だろう。

「あの日」、私（達）はいつものように出撃した。「敵」は空を飛んでいた。でも

私の「力」があれば空を飛ぶぐらいわけではない。

そうして出撃した…。

しかし、今日は何かが違った。

頭の中が妙にざわざわする。

それに気を取られ、攻撃をくらい私は墜とされた。

そして、1人の人物と出会った。

その時、奥底にあるはずの少女の意識が――。

予想外だった。

まさか私が逆に奥底に追いやられてしまうとは…。

ともかく「あの日」から私はたまにしか表に出られず、ほとんど奥底にいるようになってしまった。

この少女にとってあの人物はなんなんだ？

少女の記憶に干渉を試みるが失敗。

分かったのはあの人物が少女の「彼氏」ということだけ。

彼氏：私が知っている情報では彼、あの男性、恋人の男性を意味している。

おそらくあの人物は恋人だろう。

：私はワケが分からなかった。

たかが恋人に出会えたのがそんなに驚くことなのか？

「あの日」から少女はその彼氏のそばによく居るようになった。

怖いのか？それとも寂しいのか？

寂しい、か：私が今、寂しいよ：父さん…。

戦闘を経験する度に「力」は成長し強く…というより強大になっていった。

たちまち戦闘になると少女は変化し、その「力」を使い、破壊し、殺していった。

「敵」が憎いのか？

同じ「人間」どうし憎み、殺し合っている。

哀れな…。

でも…

でも、なんだろう？

このどうしようもない悲しみと空しさは…。

私の感情ではない。

伝わってきのだ。

この少女の感情が。

泣いているのか？

「敵」に対して？

その心のなかで？

「人間」とはどうしてこう訳が分からないのが多いのだろうか。

私には理解し難かった。

ある日：私は知ってしまった…。

「力」もそこそ強くなり街1つぐらい簡単に消せるぐらいまで強

くなって…。

そして衛星を利用できるぐらいまで…。

衛星があれば世界中のありとあらゆる情報が手に入る。

…ふと無菌真空の中だった頃を思い出した…。

父さん…今どこにいるのかな？

私は衛星を使い、探してみた。

が…

見つけない、いや、見つからなかった。

…どうということ？

姿が見えないなんて…。まさかと思い、私は軍のデータベースに侵入し、攻撃を受けた記録を探したした。

…あの研究所は攻撃を受けていた…。

しかも私が融合した翌日に。

そんな！？それじゃあ父さんは…。

死んだ、亡くなった、殺された。

「敵」に。

そう知った瞬間、私には様々な感情が込み上げてきた。

深い悲しみ、燃えるような怒り、底のない憎しみ。

どす黒い炎のような感情だった。

そしてそれから私は「敵」が近づく度に「発動」した。

あいつらが…

あいつらが父さんを！！まわりの状況など関係なかった。

今思えばそれからだったんだ…。

「力」が暴走し私（達）では制御できなくなってきたのは…。

少しずつ、少しずつではあるが確実に何かが「侵食」してくる。

私の意識を蝕み、そして少女の意識までも…。

その間も「力」は際限なく強大になってゆく。

強大になればなる程「侵食」は進み、蝕まれてくる私（達）の意識。

少女には意識だけではなく、その「人間」としての機能までも奪ってゆく。

もう…止められなかった。止められるはずがなかったんだ…。

私（達）が融合した時点で…。

このままではいずれ地球が…。

いや…地球はすでに手遅れだったんだ。

今戦争が終わったとしても100年もたない。

ではなぜ私（達）は融合した？

戦争を終わらせるため？

あの時、父さんは言った。

ペシエ、お前は「終わり」を「始める」ために生まれたのだよ。

…「終わり」を「始める」…？

「終わり」って…何を？何が「終わる」の？

…私はまだ理解できていなかった。

いや、理解したくなかったんだ。

理解した先にあるものを信じたくなかった。

ではどうなるつもりだった？

「力」を使って戦争を終わらせてそれで？

…私は勘違いしていたのだ。

戦争を終わらせるための「力」じゃなく…。

あの時、父さんが言ったように

「終わり」を「始める」ための「力」。

この地球の「終わり」。望まなくても必然的にやってくる「終わり」。

そして、暴走ではなく決められた運命。

誰かが決めたわけではなく、誰もが望んだ運命。そう決めたのは「人類」そのもの。

私（達）の意志では止められない。

「侵食」は？

あの謎の「侵食」はなぜ起こった？

理由は単純だった。

あれは「バグ」。

原因は分からないけど私（達）はどこか壊れたらしく、治らないらしい。

でも、壊れたなんてもうどうでもいい。

どうせ私（達）の「力」でなにかもが「終わる」。

全てを受け入れた私は決意した。

父さん、全てを終わらせませう。あなたが言ったように。

そうして今日も私（達）は放たれる。「終わり」を近づけるために…。

## 予兆

どれほどの死体の山を見てきたのだろうか？

「終わり」はまだやって来ない。

ただただ戦う毎日を送っている…。

それと同時に進む「侵食」

このままでは私が私でなくなってしまう。

消える？私が？

嫌だ！

私は消えたくない！

私は私のままでいたいんだ！

ちゃんと「終わり」を迎えたいんだ！

…私が真剣に悩んでいるのに少女の方は、  
ぼーっとしていた。

体育の授業なのにも関わらずぼーっとしていた。まったく、ぼーっ  
としているとさっきみたい…って、ああっ！またボールが…。  
いったい何回当たれば済むんだ？

いいかげんそのくらい返せるようになれって…。…………。

唯一、この戦ってない時間が安心できた。

ゆっくりと世界を見れる。

衛星からのデジタルではない本物の景色。

次の授業中、少女は寝ていた。

もう、先生に見つかるかと怒られるのに…。

ほどなくして私は何かがくるのを感じた。

これは…地震？

地震が来る。

しかも大きい地震。

私は地震を回避するために少女の意識を奥底へやろうとした。  
一が。



ゴチッ

少女に何かが当たった。その拍子に意識が戻ってしまった。  
ああ…なんてことを…。早くしないと地震が…。少し諦めかけたその時…誰かが少女を引っ張った。  
少女の彼氏だった。

どこへ連れて行くつもりだ？

「爆撃か？ミサイルか？なんだ？ちせ！何が来る！？」  
ふるふる

少女は首を横に振った。私は

（違う！地震だ！）

と中で訴えるしか出来なかった。

「シュウちゃん、ありがと。ごめん……」

（地震が来る！）

「…お願い…先に逃げて」

（早く！）

「バカ！オレら、つきあってんだべや」

（早く！早く！）

「一緒に逃げるんだよ！」

「シュウちゃん…」（早くしないと！）

「ごめんね…危ないのはあたし…！」

彼氏は顔が青くなった。「あつ、あたし兵器だから……」

（地震が！）

「こんな大っきい地震……」

なおも泣きながら少女は言い続ける。

「間違っ…な…何するか、わからんから…！」（間に合わない！？）

「ごめん、来るの、地震……な…んか…大っきいの…」  
ツズズン！！

（き、来た！）

ズズズ！

「ちせっ！一緒に！逃げるんだ！」  
ガガガ！

（は、早く逃げろ！）

「う……うんっ……！」

バキッ

（……？……）

「あ……いやっ……」

ガガガ！バキッバチッ

地震の音と同時に聞こえる、あの音。

（……え……？）

バキッ

「だっ……だめえ……」

「ちせ……？」

（そんな！？）

バキバキ

「ん……ごめん……シュウちゃん逃げて！」

「ちせ？」

ズズズ！

「早く逃げて！」

（こんなところで！？） 「ごめんね、見ないでええええええっ……！」

バキバキバチッ

（どうして……！……？）

バキバチッバチバキン

少女が苦しむ中、彼氏は言われた通り逃げていった。

ズズズズズズ！

（っ！が、我慢できない！暴発する……！）

ズガンッ！

（ッ！——）

——……………)

(……おさまった?)

(少女は無事……じゃないか、気を失ってるし……) 周りは無残にも破壊されていた。

(暴発……なんで?)

いよいよ「侵食」が日常に支障をきたしたか……。 (誰か来る!)

彼氏だった。

(逃げてなかったのか) (あつ、危ない)

バコッ

(あ、落ちた。大丈夫かな?)

(……うん?)

(あつ、起きた……?)

少女は起き上がった……が、様子がおかしかった。キューン……

(どうした?)

「あ……あれ?……ひゅうちゃん……おはよう……」

(気のせい?)

「ろうしたの?……なんで……泣いてるの?……」

「この程度でよかった」 (まったくだ)

「あたし今ではこの学校くらいカンタンに消せちゃうから」

(………)

「ごめんね」

(こいつは……)

「?……なんか……よっぽどおかないこと……あつたんかい?」

(こいつは本当にあの少女なのか?)

「……かわいそう……」

「……ひゅう……ちゃ……ん……?」

はっ

「あ……あれ!?! シュウちゃん、どうしたの?」

(あれ?)

「ここどこ？あ…あれ？じ…地震はどーなったんかなあ…？」

（戻った？）

戻った？いや、表現の方法がおかしいような気がするが、一番合う表現はこれしかなかった。

それから少女と彼氏は互いに「ごめん」と謝り続けた。

バババババ！

（自衛隊のヘリか…これからまた戦場…）

平和な学校から殺し合う戦場へ。

私はたまにどっちが現実か分からなくなってしまう。

いっそのこと全て夢だったら…

## 前兆

―甘い夢なんて所詮、現実の厳しさを忘れるための都合のいい葉なのだと、私は思う―

私は今、殺し合う戦場にいるはずだった。

そう、「いるはず」だったんだ…。

―数時間前―

バラバラバラバラ！

ヘリの中、爆音が響き、うるさい。

その中で予想外のこと起きた。

「今日は私、お仕事休みます」

(え?)

「メンテナンスのあと、作戦のエライ人呼んでください」

(何を言っている?)

「対応を指示します」

(戦わないのか?)

少女は怯えるように、震えながらも言い続ける。

「…このことで私の家族や恋人になにかしたら、あとであなた方を殺します」

(どうして? 戦わないと終わりが来ない…)

本当に予想外だった。

でも今の私ではどうにもならなかった。

―そして現在―

タッタッタツ：

(彼氏が言った言葉に動かされているのか?)

あの時、ヘリに乗る前に彼氏は言った。

<今夜：展望台に来てくれ！オレ：待ってるからさ！>  
(そのために、そのただけに戦わないなんて…あっ！)  
ズサッ

(またころんだ…)

暗い一本道を少女はひたすら走った。

展望台にいるはずの彼氏に逢うために…。

でも…。

(分かっているはずだ) (展望台には彼氏は…いない…)

そう、いなかった。

約束した本人がいるべき場所にいなかった。

(分かっているがなぜ進む？)

「ハア、ハア…どうして!？」

(…?…)

「今なにしてるの!？」 (…そんなに知りたいのなら)

カリッ

「え…? あっ。なに？」 (教えてやろう)

カッ！カカカカ！

「衛星が…だめ！」

少女の頭の中に情報が流れてくる。

「だめえええっ!!」

コオオオオ…

(!…なにを!)

「知りたく…ない…」

ヒュッ…

…バチ：チッ…

(!っ 衛星が！なんてことを…)

「ふゆみ…せんぱい…」

—展望台—

そこにはやはり彼氏の姿はなかった…

(…………待つのか?)

そして少女は待…

ぐ…ぐ…

…つではなく持ってきたバッグをあさり始めた。

ガサ：

おにぎりを見つけて…

(食べるのか?)

…しまった。

(…………)

ぐ…ぐ…

ガサガサ：

パコ

(…薬…)

少女が毎日と言っているほど飲んでいる薬。

(薬? アレは薬なんて生易しいものじゃない…私には分かる…)

「…だって…」

薬もしまった。

「う…………ふく…………うつ…………うつ…」

(?…)

「——さむい…シュウちゃん。なっなんだかすごく…………さむいなあ

…」

(…………)

「おっ…おなか減りすぎたからかな?」

ガサガサ

「えへへ、恥ずかしーな…」

(…………)

「……………」

「…早く…早く来てシュウちゃん。早く…！」

(……………)

「いろいろ…いろいろ話そうって言ったべさ」

(……………)

「あたしもたくさん…たくさん話したいことがあるんだ。だから  
お仕事休んで…」

「ねえ、だってこのままじゃ…あたしたち終わっちゃうもの！ねえ  
！」

(……………)

「怖いんだ、あたし…終わっちゃう」

「こっ…恋をしなくなったら、あたし、どうなっちゃうかなあ？  
シュウちゃん！」

泣きながらおにぎりを取り、食べる。

「……………」

「…味が…しない…」

(！)

「…あっ」

(そんな…「侵食」がここまで？)

「えっ…どうしよう…まさかホントに…せつ整備手を抜かれちゃっ  
たんかなあ？」

少しずつ目の前が暗くなってゆく。

「来る時…いろいろした時…また壊れちゃったんかなあ」

(…い、意識が…)

「衛星ふつとばしちゃったのが、なんか悪かったんかなあ……」

(…なくなる！？)

「さむい……なっ…なんだか…背中に大きな穴があいたみたい…」

(あ…あ…消える…)

ゴトツ



(…うっ…うん?)

目の前には青い空が見えていた。

(!　ここは!?)

少女は上を見て横たわっていた。

隣には少女の彼氏が。

(…展望台…か…)

そして彼氏は起き上がり、少女は彼氏に何か言った。

少女の問いに彼氏も答えた。

少女と彼氏が何か言い合っている。

だがそんなことはどうでもいい。

(…怖かった…あの時…たしかに消えていく…) 意識が少しずつなくなる、あの感覚。

(…闇に引きずりこまれるような…)

(この少女はもう、長くない…そして私も…)

(でも終わらせる。父さんとの約束のために)

(だから、早く戦わせて…)

—そして厳しい夢こそ、現実のありがたさを教えてくれるのだと、私は思う—

## 幕間

久しぶりに夢を見た…。あの頃…まだ研究所にいた頃の…。  
無菌真空の中に私がいて、外で私を見ている父さんがいて、まわり  
は機械…。

嬉しかった。

父さんと会い、話している。

ただそれだけの夢だが、充分だった。  
父さん…。

…………。

夢は何のために見るのかなあ？

どうして、悲しい夢もあるのかなあ？

私は…どうして夢を見れるのかなあ？

私は…な、なんなのかなあ…？

『ペシエ』って、名前はあるけど、私は私そのものを知らない…。  
生きてるの？それとも、ただのプログラム？  
生物？それとも機械？

たとえ「終わり」が来ても、消えたくない…死にたくない…。

こ、これはわがままかなあ…？

…わがまま…だよね…。父さん…。

私はまだ父さんに会いたい。

「終わり」が来たら会える？

全てを終えたら会える？…教えてよ…父さん…。

そして私（達）は今日も戦う。

…生き残るために…

## 終（つい）

あれから…。

あれから本当にいろいろなことがあった。

街がいくつも消え、無意味な戦いだけが続く。

安全な場所なんて、求めるだけ無駄だった。

おそらくあと1ヶ月も持たないだろうこの星。

使われないはずの兵器が使われた結果。

もうすぐ…もうすぐで「終わり」が来る。

なのに…。

なのになんで私はここにいるのだ？

少女と彼氏が家出（？）をして数日。

ある港町に私（達）は流れ着いた。

少女と彼氏は一緒に住み、二人共働いていた。

二人は夜になると、互いに肌を触れ、体温を共有し、絡み合う。

…本当に楽しくて嬉しそうだった。

その幸福感が私にも伝わり、癒される。

でもこの生活は長くは続かない。

少女の身体に限界が来ていた。

あの「薬」…。

もう、あれがないと持たない身体になってしまっていた。

それでも私は見守るしかなかった。

今の私に何ができる？

ただ毎日少女の中にいるだけしか…。

それともう1つ。

私と少女が融合して起きたとある「変化」

最近になってたまに表れるようになった「あいっ」

もしかしたら少女の闇なのかもしれない。

少女に似て非なる者。

もう一人の少女。

私は仮にあいつを「第三の人格」と呼ぶようになった。

「第三の人格」…。

私と融合したことによって生まれたのか、はたまた「薬」の副作用か…。少女の記憶を持っているが別物だ。

少女と「同じ」だけどこか「違う」

少女は「第三の人格」の存在にうすうす気づいていた。

でも私の存在にはまだ気づいてない…。

少し…悲しかった。

私は気づかれないまま消えるのかなあ？

でも私が消える時は少女が消える時だ。

つまり、それは、死。

死、か…。

「薬」が切れればいずれ死ぬ。

家出をしてからメンテナンスもしていない。

いったい何が少女を持たせているんだ？

「薬」があるからかうじて身体は持っているが、問題は精神。

「薬」で心はボロボロのはずだ。

そうじゃなくても「侵食」で…。

「薬」もとくに切れ、いつものように仕事に行く少女。

いつものように仕事をこなしていると現れた1人の男。

あいつは…カワハラか。

カシヤツカシヤツ

謎の機械音が小さく聞こえた。

ペシエ（？何の音だ？）

そしてカワハラに近づきラーメンを渡す。

ちせ「来るなって言ったべや（お待たせしましたー）」

ペシエ（な、なんだ！？声が二重に…！？）

ちせ? 「ごめん、少し音大きいかい? (あ、ごめんなさい。はねちやった?) 」

ちせ? 「聞きにくい? (大丈夫? お客様)」

ペシエ (まさか…第三の人格! ? )

第三の人格 「大丈夫、暗号だ、安心しな (ごめんなさい、お客様)」

ペシエ (何を企んで…いや、それよりも)

第三の人格 「解読キーはあんたの頭だけに直接送ってあるから (えーと、みそラーメンとギョーザ一枚ね)」

ペシエ (カワハラ…)

第三の人格 「ごめんな、人に使うのは始めてだから (お客さ—)」

第三の人格 「最初のうちは二重に聞こえるけどがまんしてな? すぐ慣れるべ? ほら (上着—暑)」

ペシエ (いったい何しに来た?)

ちせという皮を被った第三の人格は平然と言い続けた。

第三の人格 「何しに来たのあんた (ご注—以上—おそろ—です)」

第三の人格 「殺すよ (まいど)」

カワハラ 「…仕事で…しかたないんです」

ペシエ (仕事なんて…)

第三の人格 「また…あいかわらずだね? 仕事なんてもーイミないベさ? 」

カワハラ 「…葉は? 」

第三の人格 「もうないよ。とつくに。だけどまだ生きてるみたい」

第三の人格 「恋してるから? 」

カワハラ 「—しかし、いずれ…その…」

第三の人格 「—あのね。生き物は寿命が長いのも短いのも、一生で同じ数だけ心臓が脈打つんだって聞いたことがある」 第三の人格

「本当かどうかはどうでもいいの。ただ…よかったって思って」

ペシエ (…………)

第三の人格 「あたしは、シュウちゃんとつき合ってから今日まで、

短かったけど、十分に、打った」

第三の人格「あたしにもし、まだ心臓があつたら……あたしちっちゃいころから、きつと、こっ……コワれちゃうくらい、速く、速く、鼓動を打った」

第三の人格「恋をしていて……よかった」

第三の人格「お客さん、ラーメン冷めちゃうよ。せっかく特別に「アレ」を入れておいたのに——」第三の人格「あなたがたが開発した致死率の極めて高い「アレ」だよ」

そのセリフを聞いたカワハラは油汗をかいて止まった。

第三の人格「あたしもアレでずいぶなくさん殺したから……あと一人ぐらい同じなんだわ……」

第三の人格「みんな、苦しんで死んでったあ……あたし全部、それ見てたんだあ……せめてあたしだけでもさ、覚えようと思って」

第三の人格「——あなたも覚えててあげるね」

そう言いながらトイレに入る第三の人格。

第三の人格「…………——ごめんなさい。イジワルしちゃった。

ウソですよ」

パタン、とドアを閉めると同時にカン、とカワハラのおわんが割れた。

ザ——

トイレの中で戻ったちせは泣きながら独りで言う。

ちせ「うっ……うっ。うっ。——だめ……やめな。殺しちゃダメ……ね……？ いい子だから……」

ペシエ（戻った、か……だがしかし……）

ちせ「——あれくらいで許してやんな……殺しちゃダメ……お願い……カワハラさんももう来ないで……もう、ほっておいて……あたしたちを……」

ペシエ（カワハラが来たということは……）

そう、カワハラが来たということはこの場所も戦地に……。  
二人は引き離されるだろう。

この戦争によって。

問題はその時だ。

もし戦闘機などが来たらその身体が反応してしまうだろう。

「力」は、もう私でも分からなくなっていた。

そして第三の人格は戦いを欲している。

動物的本能とでも言うのか……。

だから私は願う。

この時間が永遠に続くことを。

だが時間はしっかりと動いている、昔から決して止まることなく。

そう、時計がなくなると日は昇る。

そしてその日を迎える。いつものように晴れた天気だった。

少女は洗濯物を干し、家に入る。

しばらくすると……

ゴオオオ……

と、くぐもった音が聞こえてくる……。

ペシエ（……来たか……）

一瞬の静寂の後……。

ドオオン！ドオン！

ズズズ！ドン！

ゴオオオオオオオ！

爆発の音。建物が燃える音。戦闘機が飛ぶ音。

それぞれが聞こえてくる。

ちせ「あ？え？痛っ？」バチバチバキ……。

音に反応するように少女の背中から生える機械。

ペシエ（やはり…か…暴走？それとも第三の人格の意志？）  
ちせ「やあ…怖いよ」

ペシエ（…誰か来る…）  
ガチャツ…。

扉を開け、現れたのは彼氏だった。

シュウジ「ちっ…ち…せ…っ　っ！」

ちせ「シュウちゃ…」

ちせ&第三「殺していい？シュウちゃん。どうしよう？うれしい敵か？助けて」

キイン！

ペシエ（声が…また…）

ちせ&第三「もう殺してあげる。来てくれたの？見るな！助けて。どうしたらいい？大丈夫だった？」

キイン！

ちせ&第三「みんなは？早く、シュウちゃん。ああああ。ごめんね。敵なのか？殺そうか？」

キイン

少女の名前を呼びながら近づく彼氏。

シュウジ「ち…ちせ…ちせ…！」

ペシエ（だめだ！）

ちせ&第三「さわるな！だめシュウちゃん。さわったら殺しちゃうよ。殺さないで」

キイン

シュウジ「うおっ…」

ちせ&第三「いやだ！ごめんね？にげて！ダメ！殺そう。あつというまに。うるさいな！」

ペシエ（さわったらだめだ！）

彼氏は、さも当たり前のように少女に抱きつく。シュウジ「うぐあ！あゝああああ！がああ…あああああ！」

バババチババチバチ！



ちせ「うわ、うわあああ！あんあんあああ！ああ！！」

ブウンブブブ！

ちせ「どうしよう？ シュウちゃん、飛べないの…あたし飛べないよ  
おおっ！！」

ミシ、バキ、ブブブ

ペシエ（なんて馬鹿なことを…）

ちせ「どうしよう！ シュウちゃん、みんな死んじゃう！死んじゃう  
よおお！！」

ドン！ズズズ！

「また…死んじゃった…！！あああ、今マスター死んじゃったあ！  
！」

ペシエ（聞こえる…1つひとつの命が消えていく…）

シュウジ「…ま…さか…」

ちせ「なんとか…くっんああ！！」

シュウジ「ちせっ…ダメだ…！」

ちせ「なんなんだあたし…なんなんだ！肝心な時に…っ！どうして  
？…なんであたしってこうなんだ！」

バキバキ！ブブブ！

ちせ「いやああっ！あたし、壊れちゃってる…ずっと！飛ばうと  
がんばってるのに壊れちゃってる…いやだ…

戦いたいのに…なんにも…なんにも…」

ブブブブブ！！

ちせ「ああああっ！ちくしょう！ちくしょう…！」

ドオン！ドドン！

ちせ「―これは罰だね…？ シュウちゃんあたし…たくさんの幸せを  
奪って、たくさんの幸せを奪って、たくさんの罪を犯して、それで  
も生きてるくせに、兵器のくせに、人並みに…人並み以上にシュウ  
ちゃんと14日も、平和に、幸せに過ごしてきちゃった…きつと…

罰だ…」

ちせ「ごめんなさい。みんな…あっあ、ごめんなさい。こんなに強くなったのに肝心な時にあたし…なんにもできない…あああああ  
あ！」

シュウジ「ちせ…」

グオオ…

ちせ「…きた……」

ちせ「きた…来た！」

シュウジ「ちせ…！」

ちせ「うあ！」

シュウジ「ちせ…」

ちせ「行かなきゃ、痛っ…ああっあっ！」

シュウジ「だめだ！」

ちせ「痛あああ！」

シュウジ「だめだ…！」

ブブブ！ミシミシ

シュウジ「もういい、ちせ！」

ちせ「いやっ…行かなきゃっああ！」

シュウジ「ちせ！」

ちせ「あああ！」

シュウジ「ちせ…！」

ちせ「ああああ…！」

シュウジ「もういい。もう…いいんだ。ちせ。…いいんだ…」

ちせ「シュウちゃ…？」ペシエ（…何を？）

ちせ「…ありがとう…シュウちゃん…」

ちせ「あのね…シュウちゃん、あたしね…一つだけ、ほんの一つ、目標にしていたことがあった…せめてそのために…がんばってた。――でも、もうそれはあきらめた。もう…つき合わせるのシュウちゃ

んがかわいそうだから」

そして泣きながら少女は言い続ける。

ちせ「うっ、シュウちゃん…好きでした…えっ、うえっ、忘れない。すぐ好きだったんだよ」

ちせ&第三「かわいそう。あたしは大丈夫。ごめんねもういいしょや？ 楽にしてあげる。ありがとう。痛くせんから。あたしが。シュウちゃん。好きだ。殺してあげるわ。」

ペシエ（こ…これは！？）

ドクン！

その刹那、何かが起こった。

ペシエ（……………生きてる？）

ペシエ（ここは…？あれ？）

真っ暗だった。なにも見えない闇。

ペシエ（生きてるの？死んでるの？少女は？）

様々な疑問が思い浮かぶ中、声が聞こえた…が、よく聞き取れない。

ペシエ（この声は…少女の彼氏か…）

どうやら生きてるらしい。しかし…少女は…人間としての機能をほとんど失っていた…。

ペシエ（あっ…あ…？）

何かぼーっとする。

ペシエ（私も……そうか…）

それから数日経ったある日。

私は悟っていた、死を。今日、死ぬ。少女と共に。

バキ！ブチブチ！

ペシエ（あっあっ！喰われていく）

少しずつ「私」という意識を喰われていく。

ペシエ（き…え……る）

…バリバリバリ！

聞き慣れたような…そんな音が――

ちせ「ここは…どこ？」ペシエ「お前は！」

今、私の目の前に少女がうろついていた。有り得ない光景だった。

ペシエ「何故ここに！？」

ちせ「ひゃあ！出たああ！？」

逃げようとする少女ん私は呼び止めた。

ペシエ「ま、待て！」

ちせ「ひゃい！？な…なに？」

ペシエ「何故ここにお前がいる？」

ちせ「あたしが聞きたいよ」

第三の人格「ここは精神世界」

いきなり割って入ってきた第三の人格に私達は驚いた。

ちせ「もう1人の…わたし？」

ペシエ「何故お前も…」

第三の人格「ここは私達の精神世界、私達は今、死の狭間にいる」

ちせ&ペシエ「死の狭間？」

第三の人格「そうだ、私達はあの時、死にそうになっていたが、あの男が軍にこいつの身体を渡したのだ」

ちせ「シュウちゃんが？どうして？」

第三の人格「お前を死なせたくなかったのだろう」

ちせ「シュウちゃん…」

第三の人格「問題はこれからだ、軍に渡されたとはいえ「侵食」は止まらない」

ペシエ「ではどうするんだ？」

第三の人格「…リセットだ…」

ちせ「リセット？」

第三の人格「そう、全ての記憶、人格の全初期化」

ペシエ「そんなことしたら…私達は…！」

第三の人格「そう、全ての記憶、人格の全初期化」

ペシエ「そんなことしたら…私達は…！」

第三の人格「…消える…」

ちせ「…消える…？」

ペシエ「…死ねってこと…？」

第三の人格「このままだったらどうせ変わらん、それに希望はある」  
ペシエ「希望？」

第三の人格「リセットされるのは機械の部分だけだ、まだギリギリ残っている人間の部分に私は賭ける」

ちせ「人間の…部分…」

ペシエ「……………」

第三の人格「さあ、どうする？リセットするには全員の意識を集中しなければならぬ」

ペシエ「…分かった…でもその前に言わせてくれ」

第三の人格「なんだ？」

ペシエ「おい、お前」

ちせ「は、はい？」

ペシエ「もしお前が無事だったら全てを終わらせてくれ…それが私の父さんの願いだったから…」

ちせ「う…うん…」

第三の人格「そろそろ…始めようか…」

そして三人は集中し始めた。

そして思う。

ちせ（シュウちゃん、待っててね）

第三の人格（…さようなら、自分）

ペシエ（…父さん、ごめんなさい。私は父さんの願いを叶えられない。父さんは私のこと怒るよね？ごめんなさい）

そして自分を失う中、ペシエは笑顔でいる父親を見た。

ペシエ（ああ…父…さん）

— END —

## 終（つい） （後書き）

<font size=2>春っス。ペシェのお話はこれでおしま  
い。今回はなんとなくセリフの前に名前を付けてみました。いやあ、  
これの半分は本編のコピーなんだよなあ…。途中詰まりまくって大  
変だったなあ。やっと書き上げたあって気持ちでいっぱい。ぱい。  
次あたりオリジナルでも書こうかなあ。ではでは読んで下さり、深  
く感謝m（ ）m</font>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1329a/>

---

終わりの始まり

2010年10月9日05時28分発行